

「優しさの連さ 海よ光れを読んで」

4年 A・Eさん

私の曾祖母は、東日本大震災で被害があった福島県の中通りに住んでいます。足が悪い曾祖母は地震が起きたあともすぐには動くことができません、家の中にいました。すると、近所の人が「おばあちゃん大丈夫か。けがはないか。」とたずねてきてくれて、とても安心した気持ちになったそうです。他の家の無事を確認するために、その人はいくつもの家をまわって声かけをしていました。

また、食べる物がなかったたので、つえをついて近くのスーパーに行くと、たくさんの商品が売り切れになっていました。曾祖母は残っていた焼きそばを買いました。その焼きそばは、いつものようにお肉や野菜がたくさん入ったものではなく、ほぼめんだけの焼きそばでした。それでも自分たちも同じように被災者なのに、近所の人たちのためにスーパーを開けて、店内に残っている食材で食べる物を出してくれているスーパーの店員さんにかんじやしたそうです。

「海よ光れ」のなかでも、みんな同じように震災にあった人たちのために、誰かが誰かのことを思い支えあっている様子が書かれています。

一つ目は学校にひなをしてくれた人たちが、自分の安全だけではなく、まわりの人たちのことを考えて、よしんがあるなかでも、薬やタオル、食料などを持ってきてくれるがたです。曾祖母も体験したように、自分が動ける状態の時は、困っている人のために行動しようという優しさを感じられました。

二つ目は、年れいに関係なく出来ることを考えるがたです。低学年の子たちは、守られているだけではなく、自分たちよりもさらに小さい子たちと遊んであげているがたがありました。ふだんの生活の中で年下の子には優しくしてあげたり、お世話をすることは、先生やお父さん、お母さんから言われていますが、大沢小学校の子たちのように震災が起きたばかりの時に、自分も同じような行動ができるのが不安です。でも、私のまわりには優しく友だちがたくさんいるので、困ったことが起きた時は力を合わせて、他の人にも優しくする行動をとりたいです。三つ目は、電気も水道も使えない中、食材のなかほして、カレーライスとくらべると具材も少なく味はうすかったけど、たくさんの人の思いやりがにこまれたとくべつなカレーライスでした。私の曾祖母も震災後のスーパーで買った焼きそばは、具材が少なかつたけれど、店員さんの思いやりで作られていたので、きつとおいしく食べた、と思います。

日本では、地震や大雨などによるしぜんさいがいが多くおきています。べんりな生活は当たり前ではなくつぜん何か起きてしまうかもしれせん。大沢小の子たちは新聞でかんじやの気持ちをあらわしていました。私も、いつもの生活の中で、優しくしてもらったら「ありがとう」、ごはんを作ってもらったら「ありがとう」などと、当たり前のようにふだんしてもらっていることにかんじやをしてすごしていきたいと思いました。